

5・仙台市科学館の文化財レスキュー活動

菊池 正昭 仙台市科学館 事業係 指導主事

1. 仙台市科学館について

仙台市科学館は、昭和 27 年に市内の中学校の理科実験支援施設“サイエンスルーム”としてスタートしてから、今年度（平成 24 年度）で創設 60 周年を迎えた。現在では理工系・自然史系の展示物・収蔵物を備えた仙台市立の科学系博物館となっているが、学校教育との連携に重点を置く理科教育・学習の拠点としての位置付けがなされており、学芸業務を担当する事業係の専任職員は中学校や高等学校の理科教員から任用されている。その任期は長くはなく、人事異動により新たな職員が文化財レスキュー活動の担当となった。

2. 昨年度までのレスキュー活動

昨年度までのレスキュー活動では、初期の段階では活動に制約があったものの、公立の自然史系博物館として宮城県被災文化財等保全連絡会議の幹事館ともなり、自然史資料担当としての役割を担うことができた。自然史標本の多くは東北大学を中心にレスキューされたが、当館は東北大学などと連携して、南三陸町歌津魚竜館の大型化石標本、石巻市おしかホエールランドの鯨類標本及び捕鯨関連資料、女川町マリナル女川の漁業関連資料の保管を受け持った。また、気仙沼市唐桑漁村センターの破損した生物液浸標本の回収を現地で行い、これらの保管を受け入れた。現在のところ、これら 4 施設の資料等を預かっている。そのほとんどは、当館収蔵庫に収められているが、歌津魚竜館の大型標本については、エントランスホールに展示しながら保管している。

3. 今年度の取組み

3-1 文化財レスキュー展

平成 24 年 2 月 6 日から 3 月 25 日にかけて、当館を会場に東北大学総合学術博物館による企画展「復興、南三陸

町歌津魚竜館」が開催された。この企画展にて、文化財が郷土の文化の象徴として大きな意味を持つことが再認識された。これを受けて、当館では同年 4 月 11 日から 6 月 15 日までの約 2 ヶ月間にわたって、企画展「文化財レスキュー展」を開催した。この企画展では、東北大学に寄託されている歌津魚竜館から救出されたギョリュウやアンモナイトなどの化石標本の他、おしかホエールランドから救出された鯨に関する標本や模型、捕鯨用具などを展示した。また、当館が関わる被災施設のレスキュー活動を伝える東北大学所蔵の写真パネルも展示した。この展示を通じて、多くの来館者に文化財の保全の大切さを伝えることができた。



文化財レスキュー展の開催の様子



おしかホエールランドのクジラ標本

3-2 自然史標本等保全再興事業

宮城県文化財等保全連絡会議の構成員として自然史標本について担当していくために、宮城県被災ミュージアム再興事業の中の一事業として自然史標本等保全再興事業を実施することにした。今年度の主な実施内容は次の3つである。

- ① 保管している被災資料の収蔵環境の向上
- ② 被災標本を再生するための安定化処置
- ③ 被災資料の展示物活用

①については、お預かりした被災標本等が元々当館に所蔵されていた標本等と同じ収蔵庫に押し込められている状況を改善しようというものである。被災施設復活までは長い時間がかかることが予想される。その間の保管スペースを確保と維持をするために、収蔵棚を増設するなどし、被災標本を含めて収蔵物等の整理を進めた。

②については、唐桑漁村センターの生物液浸標本をホルマリンに漬け直して安定化させることにした。年度途中からの事業であることや県から市への委託事業であることなどにより、市の補正予算審議終了を待たねばならなかった関係から、この事業自体が10月からしか始められなかった。さらに、受注生産のものを含むため標本瓶等の購入にだいぶ時間がかかったこともあり、この作業は年度末である3月にずれ込むことになった。

③については、貴重な標本等を長期にわたって死蔵させておかないように活用を図っていこうというものである。当館企画、被災自治体での展示などといった様々な場面での活用方法を模索している。前述の文化財レスキュー展や、当館の夏の特別展「深海の不思議 海への夢と希望をとりもどそう!!」でも一部の標本を展示物として活用したが、このような機会を増やしていきたいと考えている。平成25年3月10日に当館で震災復興関連イベント「るねっ・サイエンス～あれから2年～」を開催し、レスキューされた標本等資料を展示した。活用を積み重ねながら、いつでも本来の所有自治体に戻れるような展示パッケージの構築を行っていききたい。

3-3 レスキュー活動以外の震災復興関連事業

昨年度の報告にもあるが、当館では「るねっ・サイエンス事業」と銘打ち、科学の復興と科学を通じて被災した市民に元気を取り戻していただくという企画を行っている。文化財レスキュー活動もこれに含まれるが、他には、被災地の学校教育や社会教育の支援活動を行ったり、外部団体との連携による被災地支援イベントの開催などに



企画展「蒲生干潟の今・昔」のパネル

携わってきた。なかでも、全国の博物館が連携して6月9日に当館を会場として開催された「こども☆ひかりフェスティバル」では、1日で3,500名（ブース参加延べ数8,513名）の来館者を記録した。文化財レスキューのみならず、様々な活動において博物館同士のネットワークの重要性とそれがつくる力の大きさを感じるものであった。

また、るねっ・サイエンス事業の中で、自然史系博物館として重点を置いて取り組んでいるものに「蒲生干潟の調査」がある。仙台市民の自然観察場として長い間市民に親しまれてきた蒲生干潟を“市民の自然文化財”として位置づけ、大津波で破壊されてしまった地形や生態系の変容と再生の過程を、市民のために、後世のために調査・記録を行っている。この成果も含めた企画展「蒲生干潟の今・昔」を12月2日から2月15日まで開催した。

4. 今後の展望

文化財レスキュー活動として、自然史標本等の資料を救出する段階は終えたと考えている。次のステップは、被災した博物館等の再開のために展示パッケージを作り上げることであろう。保管している資料を整理しながら、適切な解説等を加えるための調査を行う必要がある。しかしながら、館本来の業務に加えての活動になることや当館所蔵の転落標本等の再整理作業もあるために、活動を継続していくためのマンパワーは十分とはいえないことが課題としてある。また、被災標本等を返却すべき被災した博物館等の再開に目途が立っていないことも課題である。再開の時の来るまでの間、貴重な標本等資料をいつでも閲覧し学習に活用できるように、一時的にはあるが当館の常設展示の中で展示することも解決策の一つとして有効であると考えている。